

# こぶし

NO 8



上越こぶし山の会

# 目次

○ 登山と人生と	-----	杉本敏宏	— 1
○ 尾瀬の木道	-----	田中 進	— 2
○ ある人の話	-----	松岡 健一	— 3
○ 歓迎登山	-----	飯塚八重子	— 4
○ 夏の南八ヶ岳中央部縦走	-----	丸山正夫	— 5
[剣岳夏山合宿特集]			
○ 8月14の記	-----	丸山正夫	— 7
○ 黒四ダム～真砂沢B・C	-----	清水 精一	— 8
○ 夏山合宿	-----	飯塚八重子	— 9
○ 8月15日	-----	関 由美	— 9
○ 台風の近づく立山で	-----	上野光枝	— 10
○ 剣岳夏山合宿	-----	小倉 英治	— 12
○ 夏山合宿を振り返る(07)	-----	杉本敏宏	— 13
○ 北鎌尾根・北穂高へ	-----	八木 真澄子	— 15
○ 南アノス・北岳	-----	田中 進	— 17
○ 雨飾山	-----	保坂 留子	— 20
○ 奥運祭典	-----	橋本 歩	— 22
○ あこがれの穂高	-----	高橋 直子	— 23
○ 清掃登山について	-----	古木 博明	— 25
○ 11月の火打路	-----	丸山正夫	—
○ 会員紹介	-----	関 由美	— 26
○ ハイキング部よりみるこまへ	-----	大島美昭	— 28
○ あとがき	-----	田中 進	—

# 登山と人生と

杉本 敏宏

よく「登山と人生は似ている」といわれる。私もそう思っている一人だ。

登山は、一つの山に登るのにいろいろなコースがあつて各人各様のコースを**選**べる。尾根道もあれば、沢登りコースもあるし、岩登りも願工に立つこともできる。その上同じコースでも、一目散にわき目もふらず登つたり、花を賞み、鳥の声を聞き、谷川のせせらぎに遊びゆつくり登ることもできる。あるいは登寝して夜登ることだつてもできる。登山はそれほど多様なスポーツだ。

人生だつて、同じ一生をいろんな生き方をすることができる。のんびり屋もいれば、せっかちもいる。人を打落しても出世しようとする者もいるし、みんなと共に進むうと思ふ者もいる。各人各様の生き方ができる。

ただ、登山と人生の**決定**的なちがいは、登山ならば同じ山へもう一度、今度は登り方を**変**えて登ることができるが、人生はそれ

ができる**ない**ことだ。それは残念なことかも知れないが、**逆**にみれば一度しかない人生、やりなおしのきかない人生だからこそ、いいのかも知れない。(登山も別の意味で繰返しのきかなくなることがある。――遺棄だ)もし、人生やり直しができるとしたら、恐らく「失敗したらもう一度」ということゝ緊張感のない、真剣さのない人生を終つてしまふだろう。そんな人生は意味乾燥ぶ生きがいのないものにはがいない。やり直しのきかない人生の中で、今日よりも明日が良くなることを願つて努力するからこそ充実した人生を送ることができ、その努力の中にこそ人生の**楽**しみがあるのではないかと思ふ。

毎日の生活は**単調**であるかも知れない。楽しい時も苦しい時もあるだろう。でも、そうした一日一日が人生を形づくつていくのだろう。あたかも登山の**一歩一歩**が**単調**な苦しくつらいものだが、その歩みがやがては頂上に立つことを実現させ、喜びを倍化してくれる**様**に。

# 尾瀬の木道

田中 進

六月六日 会員外の参加者九名を含む  
総勢一三名で直江津駅を出発二一時三〇分  
六月七日 沼田駅着二時四〇分。行列を作  
らざつと乗り込んだバスであるが残念な  
がら終焉迄立ち通しであった。がマンク。  
小雨降る雷を眼下に到着五時。富士見峠を  
経て意宮に向う峠路は雪溶け水の流れる泥  
んこ道であった。ようやく峠を越えてミズ  
バシヨウとリニウミンカの花咲く尾瀬が原  
の意宮に到着二一時三〇分 雨も上がり、  
よく整備されたぶ厚い木道を気持のよい靴  
音を立たまながら今日の幕営地、下田代十字  
路に向う。下田代着二時一五分 テント  
を設営の後、炊事班を残して外は三条の滝  
と温泉に行つたが非常に混んでいたのて途  
中の平滑の境口を見せ引き返した。  
テントの夜は寒しき證らしいの場なり。今回  
は会員外の人の方が多いけれど皆、最初か

ら仲間を感じて実になごやかである。その  
せいか外のテントから「……」と文句を言わ  
れたような気がした。

六月八日 下田代から白砂泉越を経て沼尻  
小屋に到着九時四五分 ここから二つのコ  
ースに分かれて尾瀬沼山荘を合流する事にな  
り、我々は静かなる尾瀬沼の湖面を石に  
見ながら長蔵小屋へ、長蔵小屋着二一時〇  
五分 ここには尾瀬に死すの著者がある  
故平野長靖氏の小屋がある。ミズバシヨウ  
の群落が素晴らしい。さらに尾瀬沼山荘に  
足を向ける。山荘着二一時四〇分 ここか  
ら尾瀬沼越しに見るヒウチが岳は美しい尾  
瀬を閉塞という名の破壊から守ろうとして  
いる人達がいる。尾瀬に限らず我々は今、  
自然というものに対して人間のモラルを向  
わねている様な気がしてならない。この山  
荘で昼食となったがこの時我が会の名カメ  
ラマンに素晴らしいスナップ写真を撮られ  
た犠牲?となった。うるあしのて女が教人  
いた様である。

ある人の話し

松岡 健一

ある若い女性が大腿部の骨折のため、山を断念せざるをえなくなつた。本人はまさか永久的にそれか不可能とは思つてはいなかつた。レカレ長い持合、プレートが仕組まれてあり、時々骨痛とその不安があった。こればかりは時の過ぎるのを待つより仕方が無かつた。死が早つてもかえつて後の苦痛が大きいので後少りの観念は持つていた。ある時思ひ切つて主治医に尋ねた。果して返答は予想されてはいたが、改めてはっきり申かされてしまうと、お世かその辛さ、自分の脚を強く締め付けられるのなつた。松葉杖での歩行許可が来ては週一回、それとはほとんどベッドとチェアをのり毎日居た。かつての社会生活の自由とは真くかけ離れた大きな違いなつた。ある一部の骨の異状の後、これ程まで苦しむことは彼女にとつて山で苦しむよりも何倍以上の者になつた。少くは目的があ

り、その到達タイムが予想されるし、長い山行の疲れと苦しみは自然の景観も慰みすることゝ忘れさせてくれる。いかなる判断と手段を考へてもどうしようも無い議論ができてしまう。過去の思ひ松葉杖山行が時たま頭をよぎる度に、自分の足はあつたか無性に腹がたつた。左足の自由はその後回復訓練いかんで山へ再び行かせる難しかりけ望の念この生活も克服せむいど。今年の四月は帰れなかつたとうである。がランとした着室の中で再び他の患者さんの疾る目を待ちわびる寂しさは人ごとながら本当に気の毒と思つた。若田の機が笑く頃彼を無事退院できまよう帰りにわをう願つて出てきたのを。

終わり

歡迎登山

笹ヶ峰キャニオン・火打登山

飯塚ハ枝子

7月5日 山田に行かされた新会員歓迎会に参加する。今日の夜9時少し前に笹ヶ峰キャニオン場に到着。キャニオン場から少し離れた山道も所々テントが張ってあった。

先輩達が料理してくれた肉うどんが今の晩のスニョーであった。すごくうまくおかわりもした。もう少し食べたかったが、初対面の人数が多いため早めに止めた。本当はあと一杯入ったのですが。

その夜雨が降りテントの中まで浸り込んで厚手の靴下もビツンヨリ。でもこの中の夜毛を楽しいものです。夜の山の中、テントの中でのワインの味も好きです。またお酒は私の得意とするものの一つ。

自己紹介のときとても困った。実は緊張すると声も震えてしまいます。だからとても人前で話すことが苦手なんです。

山の数は数えきれないくらいあり、社会があったる覚ええたりと思える。眠くなり寝るの中に入り、一番隅の隅張ったテントで寝る。おひかその後山男の牛人がここへ入ってきたので、一瞬驚きを生かそうと思っただけですが、疲れておいたし又出ることも不自然な感じだったので止めた。夜中おつと寝る音のようなものがある。私の耳に入ってきた。

翌日 寝不足のせいかなニテントで眠り、火打登山は之回目であるが途中から雪を踏みしめて歩くコースは、雪の降り時と危しが全然違うので驚いた。小前の中 頂上は雪で視界はさかび向も霞かかった。ヤット皆に行つて行った私ですが、これからは正直しくお願致します。



蕉芭水

おわり。

夏の南八ヶ岳中央部縦走

丸山 正夫

私はいくらか余計に経費が重んぶも、下界の時間制約を忘れて自然に浸って汗していただいた。この山は火打、妙高に似て、それを許しまくれる山並みである。いつ降りても、我々高田人をスムーズに帰しまくれる。赤岳―硫黄岳を白降りて走る岳人が多い事を皮肉っぽく話す小屋人もいたが、味のない山行だ。私達は二泊三日を歩いた。

美濃戸口% 12時―美濃戸口時―鉦泉16時30分(泊)% 6時発―硫黄岳11時―石室12時―横岳14時―赤岳16時(泊)% 6時発―行者小屋の時―美濃戸10時―美濃戸口11時

美濃戸から幾分入った娘達に見せまはならないものを私は見た。空堀にインスタント食品が円陣をつくり、器には雨水が溜つたり、食べ残しがあり、ある。先に行かせた片付始めたら、こゝちにもあるあや

と言う。察限のない話だった。

鉦泉が近くなると同心にばやいたら、同心もばやいたのか雷のゴロ音が遠く響いてきた。

鉦泉は個室だ。だが東京の若者と相部屋。シユラーフの娘達に着がえさせ、私は一杯傾けるが一向に杯が進まない。翌日、腹がゴロ音を発し、ボンベ満タンを硫黄岳へと登る。山小屋のトイレの存在がこんなにも嬉し懐しく思った事はない。朝の清掃が済んだばかりの部屋が猛烈なキシ響が催され、その硬弾に胃や腸まを候用したかのようにアツカリした腹になつてしまつた。永い砲撃のようだったが、朝食を済まして降りて来る娘達と一語だった。たどとは高いものだ。バツチ、しおり、ファンタ等に支出を大とする

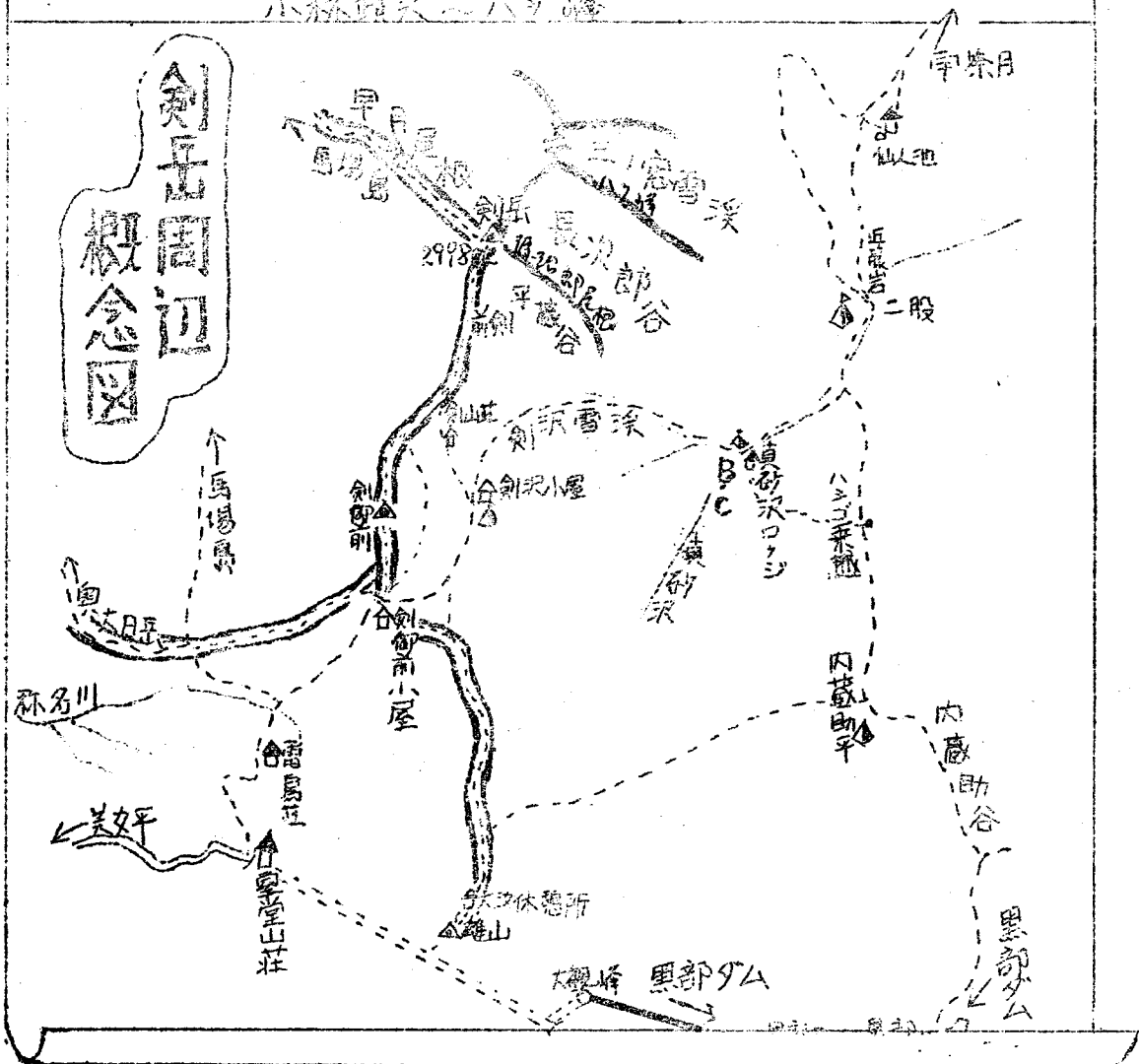
山頂小屋に宿った岳人のマナーの悪さは別に話さず、た覚えがする。

面白い事に山頂小屋のみやげ物が美濃戸の物より安い。世にも不思議な話だ。

# 劍岳夏山合宿

期日 昭和50年8月13日～16日

参加者 CL 杉本敏彦～ハノ峰 田中進～源翁郎屋根  
 古木博明～源翁郎屋根 南由美～仙人池  
 清水精一～内蔵助谷切込 村真理～仙人池  
 小倉泰治～仙人池 上野先支～立山別入山  
 丸山三夫～仙人池 飯塚八重子～立山別入山  
 小林清美～ハノ峰









八月十五日（金）

関 由美

そ、と目をとじまごらんない。

そしてら あなたを剣の眺望台に仙人池迄  
連れて行つてあげましょう。

川が流れまいるんぞす。

上高地の梓川の様な清き流れ、  
ふも大きな石が一岩つて感じかな？し、  
ゴロゴロしまいるけど。

そして、そこに吊り橋がかかっているんぞす。  
河童橋の様なあんな立派なものじゃないけど  
一人渡ると、ユサユサ揺れて、とつてもス  
リルのある橋。

そこを渡つて、階段状の山道を、エツテラ  
オツテラ 登つて行くんぞす。

幼い頃読んだ童話の中にゐる天狗が住ん  
だいそうな山、そんな山の道なんぞす。

ホラ 汗をかきかき フーフー言いながら  
登つてゐる姿がみえるぞしょう？

ふも フツと一息ついて

小窓王、三ノ窓、チンネなど嶮々と連なる剣  
岳をみあげると、夜山など吹っ捲んぶしまい  
ぞう。

青い空 白い雲 三ノ窓 小窓の雪渓のたす  
きを肩からかけた雄々しい剣

誰が描いてもすばらしい絵になりぞう

やつとのことゝ山を登りまると、一面に

チンブルマが咲きみだれまいます。

コバイケイソウも咲いています。

親指姫の様に小さかつたら、チンブルマを揺  
りかごにぶさるのだけれとも……

そして、ここから五分。

やつと仙人池に着きました。

目が細く、白髪ぶ、長い髪をばやし、杖をつ  
いた仙人の様なおじいさんがいるといいのだ  
けれど、現実には、無精髻をばやしたアルバイ  
トのお兄さんがいるだけ。

ふも あなたにもみえまきたぞしょう？

あのすばらしいパノラマが。

— F I N I —

台風の前づく立山

上野 光枝

夏の剣の合宿は、私が一番遅く入山したのち。私は、B・C迄二人を行かなければなりませんの心細か、たのちすが、これも一つの良い経験でした。

私は天気予報に耳もかかず、山の準備をしつゝいと、家の者が「台風がきているというのに行くのか？」ときかれ、始め「台風の前づくいていることを知ったのち。今思うと、これはとつても危険なことなんぢね。山へ入つてつづく感じました。ちも台風がきているといつてもみんなの食料を持つて行かなければと思うとやめるわけにはいかないし、それにあきらめるのちとつちつらいことちすから、意地ちも行のちとちと決心しました。

深夜の時に家を出発、兄に富山まで送つてもらい大変たすかりました。富山電鉄は、汽車の時間前づくくとポソリポソリと山男達

が集まつてきてそのうち観光客らしき人達も集まつてきて駅はずいぶん混雑してきました。この人達みんな行くのかしら？おとろきちす。立山つて人気があるのちすね。この混雑は、雄山の山頂迄つづきました。途中私のガックを見つて「重いちすよう、何キロぐらいあるんぢすか？」ときく人がいました。そんな時、私は山女に見られるとチヨッピリうれしかった。雄山を昼食をとつて、ここちの会の人達と合う約束なのち一時逗留つてました。が、いつちうに來ないのち、出発することにした。台風のせいのか風は強くなり雨は降つてくるし、一人を道に迷わす行けるか心配、心細いし、あたりを見回して、山になれちいそうな人をさがし、一諸につれちい、ちもらおうと思つて見ると、いました。ちようちガックをかついて出ようとしたので、とこまて行くのか聞いてみると、方向が同じなのち一諸につれちい、ちもらうことにしました。この時つづく自分ち無力さを

知らされたって感じ。帰らなむ、と強ま  
しなくちやなんぞ考へながら、出発す。

赤きながら話をするとこの人は、東京から  
ほるぼるや。マダラさうです。そして、写真  
を撮るのが好きで今迄に三千枚程、友人に持  
つまいかれたり、売れたりしたさうです。

なにしろ、写真の収入の者が多いんです。

この人も面白いぶんキチガイです。それに、

この北アルプスが好きでよく来るんです。

ふも立山は初めマダさうです。……とこんな

ふうに話が始まるので、あの方に聞いたこと

ある様な人がいるのでも、見まちがいじゃな

いかなと思つて追つてよく見ると、うちの

会の方さんでした。うれしかつたなあ。

あの時は父親がまうまういてくれたみたいで、

ホットヒと愛べしたのです。ここをあの人と

は、お別れです。もう少しいろんな話を聞きた

かつたのですが、そんな話にもいかず、おれを

言つて別れました。そしてSさんにみんなと

うしてると聞いたたら「あそこにいるよ」と、

空室の方を指示するはありませんか。私は  
またからか、マいるんだらうと思つて「うそ

ふしよ？」と言つたら、Sさんは真面目な顔で

また言うのです。「大きな台風の来るから

下山したんだ」と言うのです。私は信じられ

なかつた。下るも信するしなくつて、カマカリ

しました。おかげでかまゆりマ下山するのをも

やつとす。Sさんも面白い分被れさいるみた

いふす。二人して、だらだらと下山して、平

な川原みだいな所を休んで、また立上がり、

数軒行くと、またまた、あ方に見たことあ

る人が私達の方へ向つてくるのです。うちの

会の方さんでした。あかえにきまくだので

す。うれしかつた。天の脚打と思ひました。

そこで私のザツクをSさんが、Sさんのザツ

クをOさんが着せ、さうして、みんなの所へと

登壇するたよりつきました。五時現駐車場ま

で来て、ここを又食を作つて食べた帰りまし

た。帰りには、おむくマ、みんな、ハムを歌合

歌なんをさしていたようです。私は歌声も

気にせず、スキーとねむりに行きました。

家へついたら、バカにされました。

「台尻に行くんだものあたりまえだ」と  
言っく。

というわけを私の父の合宿は 一日で碓氷  
まで行つて来ただけ。終つてしまつた、下のふ  
す。非常に残念です。来季は「ぜひ」天気の  
良い日に剣へ行こうと思ひます。

来季は 天気が悪きよく晴れる 天気が  
頭に入らぬ山へ入るようになくちやと一喜言  
してます。

剣岳・奥山合宿 下山

一おありー

山合宿

8月16日 (土)

台風5号の接近というので今日、全層下  
山とすることになり、非常に残念に思つたが  
しかたない。計画の予定では、17日組と18日  
組がそれぞれ下山日であつた。早朝から他の  
パーティが撤収を始めている、残がパーティ

も撤収をしまつた。もうサント場にはサ  
ントの数が少なくなつていた。剣沢の雪渓を登  
つて行くと、どこからやうて来たのか雪の上  
にサントシヨウオが人間に踏まれていて、それ  
にしては雪渓の長いこともういやになる程だ。  
やはり日本三大雪渓のひとつだけはある。そ  
れにザックが重い。まだ2日分の食料等がの  
こつて山入の所と重さがほとんど変わりがない  
ような気がした。雪渓もやうと終り、剣沢の  
サント場にて大休憩を取り、丸山カメラマン  
による記念撮影が終つてお茶をこころ今日山  
入の上野さんに逢う為に残がこぶしの木1つ  
TTP男が立山へ行く、丁度別れたその時に  
残がこぶしのF&Yさんと逢ふによる大ツラ  
ス成流氷、後にはいる野郎たちはおもしろい、  
ただ下を登つて行くだけ、曲角が次々と衰つて元  
気なのはびくくりした。剣前小屋に着く  
と風が強く降り雨もあつて来た。いよいよ雷  
鳥沢へ下る、もうこの付近は瀬光亭の方が沢  
山いる。昨日TTP男と話しの中に「オイッお  
前へ荷太とネアツクを携つて来たか?」なん

てじょうだんを言つて笑つた。

観光客の中にはいろいろな姿をしてくる者がいて見ているだけで結構楽しくなる。空堂のバスターミナルでTTP君らと来るのを待つ、そんな時、後二日の休みをどうしようかと考えてしまう。上野さんとTTP君の娘が見えて全盛さう。バスにて美世平。ここからテトブルで立山駅到着、駅を去るともう冬は薄暗く、車のある駐車場が非常食用のラーメンを食べて高田へと去る開始!! 台の車に無線機を入れてにぎやかに教合戦などをしながら帰りの時間が早いように思つた。高田へ到着したのが3時すぎだった。



あわり

### 立山台島を振り返る

C.L. 杉本 敏宏

今年の台島は、あわたりしい準備の中で迎えました。それは、付馬乗集立山のすぐ後であつたし、台島直後に予定されてくる岩登り講習会のゲレンデ整備に手をとりあつたからでしょう。また最後まで参加人数が確定しなかつたのも原因でしょう。

B.C.として真砂沢付近を登るのは、オ一に、剣の尻根や谷を登るのには剣沢小屋付近より良いということ、オ二に、剣沢小屋付近の混雑を避け出し、サレでリアルパン的な奮闘気の所にテントを張りたか、たことによるものです。しかし、登山ブームのせいかな真砂沢付近もまたテントにうまり、剣沢小屋付近もたいして変わらなかつたといえます。

入山に午間どり、予定していた下廊下コースは中止しましたが、後から入山した清水君の語では土砂崩れで道行止めだ、たど

うで、不幸中の幸いでした。とこまでこのことは、帰りに気付いたのですが、望堂にその旨電話がしてありました。こういう事は登山口でちゃんと確認しておくべきだと思いました。

15日は三コースに別れて行動しました。

源治郎辰根二名、ハツ峰と、仙人池へ4名です。またこの日、清水君が黒田から、飯塚さんが望堂から入山しました。尚、源治郎パーナイが無線機を忘れた連絡がとれなかつたのは大変なドジでした。

JKACが合流形態として定着を懸念した理由は、①参加者の力量に応じたコースを並び差ることが出来ること、②休暇の日数が異なっても参加できることなどが、この目的はほぼ達せられたと思います。

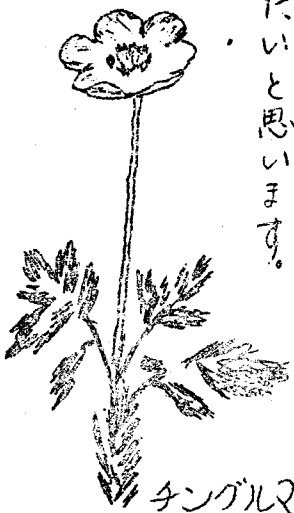
遅く台風と号の接近で、16日に下山する事になりましたが、あの時点では正しい判断だったと思います。それにしてもあの天候の中を軽装備で入山する人が後をたどなかつたのは秀えさせられました。おま

けに台風接近を知らない人もいたのですから。

16日の向陽は、この日入山の上野さんと連絡方法がないため、うまくめぐりあえるかどうかということでした。無線機から迎えに行つた清水君の声と共に元気な声が流れてきた時には、ホッとしました。

全体としては、台風のため、予定を全部尚化できず下山しましたが、源治郎、ハツ峰パーナイは自らの力量を確認し自信を研ぎつたことでした。うし、仙人池パーナイは最上の天候のもとで鋼の展望を満喫できたことでした。また、途中から入山した人達も、自らの可能性をさらに高めたのではなにかと思っております。

何にもまして、事故もなく全員無事下山した事を喜ばたいと思います。



チングルマ



北鎌尾根 北穂高へ 28/8/31

メンバー 桑原 木島

山崎 石本 八木

どこの高い山に登っても、同じ姿で見える槍、おぐにでもあの穂先に登りたいと見ると度に思ふ。4つの尾根の真中にピコッと立っている穂先を、残っている北鎌尾根に昨年の夏の山行以来夢見ていた。

でも未熟な私に今年実現するとは思ってもみながかつた。良きリーダーの匙に行けた事はとても嬉しい。

8月28日、29日 ほか

長野駅乗り換えのいつもの夜行列車に松本駅へ向う。松本駅では蚊の群に悩まされ、睡眠不足。そしてまだ夜の明け切らぬ大町に降り、駅前からマイクワロバスにて葛温泉に向い、そこからリニックはトラップにお願いして、ヘルメットをかぶり、朝食だけ持つて歩き始める。深い山合いに今迄見た事のない様な別世界があつた。30日の

る重ダンプが行き交い、押し潰されそうに銷道してしまふ程湿気のあるとして、スレ

ールの大きい工事現場を、のこり歩き東

沃土合へ、そこで睡眠不足を解消すべく、

朝食をとり、荷を受け取り去る。東沃土合の

らには重ダンプが狭くなり、重ダンプの者は塵の

ま、夜つて川のせうらざと息のささり音が

聞え、や々と山行の気分になつた。丁度昼

に湯候に着き、一休み後、気がなり早々に

にして去る、ここからは沢松の歩き、一

日目の宿は北鎌沢へ入る少し下の天上沢の

湯原にテントを張り、流木で大キヤンプを

作り、と聞き、明日からの安全を願つて眠

つた。

高田 松本 大町 湯原 東沃土合

湯原 霧島 霧島 霧島

8月30日 ほか

霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島

霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島 霧島

も天氣に恵まれよう。

広い川原と別れ北鏡沢に入る。氣持も良  
さそうに水が流れてくる。この沢は、私達と  
人だけの登山道に思える。大きな石がゴロ  
ゴロした沢の途中で加藤文平節のレリーフ  
を見、何となくしんみりしてしまふ。

やがて尾根近くなると前は眞青な山さな空  
が見えるだけ、あの向こうに何がどんなに  
見えるの不安まじりにコルにある。直ぐ前  
には赤茶けた硫黄の岩稜が美しくも異様に  
見えた。

コルでは一プアした後、草付の中を歩き  
始める。少し行、E所で猿の大群とカモシ  
カに逢い皆な仲間逢ったかのよう嬉し  
そう。今日は全然人にも逢わないのでな  
さらです。そこを過ぎるとそろそろ岩稜の  
道に降り橋が近くなつて来る。それ程高度  
感はなく、気分的に楽である。

北鏡平でひと休みしたのち、いよいよ最  
後の登りである。凹角から登り始めた、な  
かなか私には身動きが出来ず、リュックと

先に取、てもらい、下から肩を借りてどう

にか取けた。もう私の目の前には何もな  
之ざるものがなく、振り返ると今日歩いた  
尾根がずつと伸びている。一瞬木ツとし、  
感激ノ穂先より下る寸前木島さんとブロッ  
ケンに取られこれより始めての出来事に気を  
良くして下る。肩のサント場では列車とほ

ぼ同じ所にサントを揺り、機蓋、す、かり  
酔がまわり、小屋の水上げポンプの音を聞  
まなばら几時半シユラフに入る。  
露地 6:20 二股 7:40 コル 8:00 北鏡平 16:00  
サント場 17:40 橋頂上 17:20

8月31日 ばれ

サント場を昨日の感激もさめぬまつ快  
調に沢に向けて去る、天氣は今日も良  
そう。甲岳の水場で水調達、洗面と沢め  
いたが、水が枯れていてあてが外れてしま  
った。ずつと下まで汲みに行つてもらう。  
そこで早くも水あずきをいただき、歩き始  
める。

徳高への徒走路も、夏のある最盛期と違い教える程の人にしか違わず、のんびり出来る。

去年来たこの道を思い出しながら北総に登る。北総の小屋もあり夏のぶわめきは全くのんびりゴキと燃す小屋の人が印象的だ。た、

徳高前穂が目に美しい姿で登びとんで来る。いつ見ても何となく心落ち着く山様だ。

北総より急なジグザグ道を洞沢のテント場へ。昏が別と快調につき横尾迄下る事になり、

洞沢で徳高に別れを告げた。横尾では川原の片すみで夜更く返すベリングとしく、又マー

ハイいただき眠りました。

テント場65北穂上55横尾17.20

9月1日 ぼれ  
とうとう今日でこの山行も終る。上高地迄

大きな声で歌を唄い振り返り振り返り歩いた。連日お天気に恵まれ、より一層楽しい山行でした。

八木 記

南アルプス北岳

期日 3.30 9.20 ~ 9.23

メンバー 小林 浩 丸 田中 達

南アルプスは三千メートル級の山が連なる

非常にスケールの大きな山々で、中でも北岳は本邦才二位の高峰である。しかしそんな山

も交通の便その他から足を踏み入れる機会は少ない。白鳥や徳高のような幸やかさのない

北岳にいつか登ってみたい。そんな気持ち強くして来たが今年来のパートナー小林氏と入

山の機会を得た。

9月20日、午前二時甲府着、駅では少し前に東京から着いた筈の小林氏がニコニコと迎

えてくれた。氏の得た情報では前日の台風で途中の橋が流された為、広河原へはタクシーを使

って行く他ないという事であった。小林氏が見つけておいてくれた同乗の登

者二名と共にタクシーで広河原へ。広河原着は四時であった。暗い中、吊り橋

を渡り広河原小屋の前で夜が明けるまで仮眠  
を取る。廣寒の朝の七時、夜明けのコーヒ  
で眼目を覚まし、出発。最初は見通しのよ  
かない急な登りが続く。お母はある背中の荷  
はさすがに重い、しかしこれは冬に備えての  
訓練を兼ねているのである。

小屋の場合、無雪期の縦走は軽装化という  
事を重要視しない。なぜなら体力的にハンディ  
のある者は無雪期に苦しい思いをしておかな  
ければ冬の重装備の時にバテる恐れが多分に  
強いからである。

白根御池を過ぎた頃よりがスチ出て視界が  
さかなくなりました。道は粗悪わびず急  
な登りが続く。ここで食付く事は登山者が非  
常に少ないという事である。時季外水のせい  
か、それとも南アルプス全体に立える雪なの  
か……。バテ気味の体で三千百九十二メー  
トルの頂上に立ったのが二時四十分だ。た。  
大巖壁を期待していたのだがそこに待って  
いてくれたのは無情なる濃い霧と強い風だけ  
であった。強風の中、北岳稜線小屋にテント

を張る。

9月21日。

朝起きると強い風であった。この強い風と  
霧いがかすが味気なくただ疲れるだけの稜線歩  
きを約束していた。我々の日程には一日だけ  
予備日なるものを取ってあったし南アルプス  
に来て北岳の勇姿を見ずに帰る事もなからう  
という事かソク決意と決まった。

たいくつではあるがたまには挑戦するもの  
もいいものだ。

「おさんの話でもしませう。うか小林さん」  
9月22日

富士山が目の前であった。朝焼けの空、そ  
して雲海に遠くお富士、そのコニーアの山容  
は実に端正で美しく、しばしひと来たまま  
であった。昨日は一層もその姿を見せなが、た  
れ岳を今朝は朝の霧を受け赤く輝き始めて  
いた。そくさくとテントを撤収の後はお富士を  
見ながら快適な縦走路を歩く。

向の岳、濃尾岳を過ぎた河内岳に向う途中  
のコルに大内沢を経て奈良田温泉へ下る分岐

表がある。一日決意したので、そのまゝ奈良田温泉へ下る事も一応考えてきたが尙近に見る塩見岳への稜いでつい足が広河向岳に向つてしまつた。広河向岳から地の沢小屋屋に向つたまでではよかつたが、この道が又ひどい道で途中で道がなくなつてしまつて、こゝの道が何ヶ所かあつた。登山者には一人も会う事もなく、実にさびしいコースであつたが、ただ縁のジユウタンを敷き詰めたようなコケむした山膚と無数の立ち枯れた倒木がいかにも奥深い南アルプスを感じさせてくれて、気が良かった。ようやくの事で地の沢小屋屋に着いた頃、明日の苦戦を懸ける雨が降り始めた。

9月26日

昨日からの雨は止みそうもなかつたが日程に、もう余裕はなく雨の中を出発、しかし塩見岳への登山道は指標もなく非常に分り難い地図を見ながら河原をウロ／＼して貴重なる馬肉を口スしてしまつた。ようやくの事で道を見つけたまではよかつたが、この道が又、大変な道で廢道に等しい道であつた。

急な足腰を登っている途中で道を見失なつてしまひ、トラバースすべき所をまゝ、すぐ登つてしまつた。結局このまま行くのは時局的にも無利どの判断が、小林氏と協議の結果このまゝ登つて奈良田温泉へ下山する事にした。下る途中トラバースの道も見つかつたが、又の枝分れに残し河原へ戻つた。林道に出て近くの東海パルプの作業小屋に立ち寄り、乗せてもらへる車があるかどうか聞いてみたが、車はないと云う事で、分々がツカリしたが、そこで少し休ませてもらひ、熱いお茶を飲ませてもらつた。

奈良田越迄は大井川沿いに林道を歩く。

奈良田越から温泉迄の山越えの道は比較的

整備された道ではあつたが、ガスで視界も悪く、裸れも手伝つて、ながながと道に感じてはななかつた。西山ダムのある奈良田に着いたのは五時近く、雨と汗、それに埃に汚れた体を温泉で洗ひ流したかつたが、それかならずとくさくとバスに乗り込んだ。

今回の山行で感じた事は、南アルプスは地ア

ルプロセスの華やかさはないが、それだけにま  
う北アルプスにはない向かが残っている様  
気がしてなじみか、た。再発行、てみた山  
々である。

\*コースタイム\*

9/19 直江津 発 (17:37)

9/20 甲府 着 (2:30) 花 — 広河原 (4:00) — 白根 (7:00)

御池 (9:30) — 稜線 (10:30) — 北岳 (14:40) — (15:30)

北岳稜線小屋 着 (16:30)

9/21 沈殿

9/22 稜線小屋 着 (6:40) — 向の岳 (7:20) — 鳶岳 (8:45) — 池の沢小屋 着 (16:35)

(10:35) — 広河内岳 (13:00) — 池の沢小屋 着 (16:35)

9/23 池の沢小屋 発 (6:30) — 東海ハルポ作業所 (9:30) — 林道分岐点 (11:00) — 奈良田越 (12:45) — 奈良

田邊泉 (16:30) — 身延駅 (17:20) 発 (19:128)

9/24 直江津駅 (11:53) 着

(田中記)

# 雨飾山

S 50 9月14日

磯城 智子

雨飾山 一九六三M なんともあ 永すぎ  
た巻 あげたしては 著者の名で スラキな山  
びやありませんが、何しろ何年振りかの登山  
なのですから、此日朝から良い天気でした。  
がのに私はお野場さん。子氏も待たせてしま  
ったのです。ガンガン車は走り、そして走り  
過ぎてしまつて 根知から入り、そして走り過  
ぎてしまつたのです。お陰様で予定時間は経  
過してしまつたけれど、それはあまりに良い  
天気なので初級の不々の荒れと青いぬげな様  
な望とに つられたのです。いいドライブがで  
きたと思えば何んのことばありません。  
さて 駐車場から 檜山新湯から ツツエ  
大きなカエルがいたり、へびが出たり、陽の  
光はまじ強くて汗がホクホクおちてくるので  
す。それから優雅に 檜山新湯での半日を過  
したのです。 ニニに 兎が 放されて 地元の子供



「泉連祭典」

巻在山上に続かして S 5 10 3 4

橋本歩

の月に入会させて頂くと、推測長  
雨霞は続する慶賀の山行である。入会  
する迄は火可山に野村ひかける程度か  
日本百名山にあるこの巻林はほかほかね  
度までついでいふであつた。

布着と不潔な山にひめ、エロの車に分乗  
して高野山をめぐり、途中道に迷ひながら清  
水部等に1830頃つく。この部等は著る着い  
た人情味のある所であつた。

19.00泉内登山の奇遊会が行われ、山のゴ  
ミを藪と長の藪をまきく。意外登山のゴミ  
処理のびさんな事を身にして山(自然)は  
国民全体の要物であるということを強く印  
象づけられた。

登山のコースは、尾根歩きコース、ムクヒ  
コース、米多沢コースの3つに決められ  
ていた。私は米多沢コース同行者(木島)

初年、田中、南、橋本、五葉、ちんせ  
ん、おかりは初めのことで、一休次とぼん  
お藤まののちも分かつたのに因々しくおの  
コースを歩んでしまつたのである。

心道言10分位行くと石のゴロコロしてい  
る河原へ出たのである。短井のその石から石  
への移動は程とつて大変であつた。

でも買取てくると土。道を行くより遠く野  
けることに気がついたのである。河原から  
よいよ次に入る。驚いたことに石の上の木  
を踏む、その上に自分の足があるではない  
か。つまり深淵とは、水の中を歩くこ  
とはのかと知つたのである。こんな調子でか  
ら同行の人々にはいろいろ迷惑をかけたし  
まうな。途中、他のパーティーの人が腕にケ  
がをしてしまった。その人は地下夕むら  
き、ヘルメットをかぶりさつぞうとした怖  
おの、女性であった。私はこの時身がひきし  
まる思いである。果して私は頂上まで行  
けるか、どうか急に不安になつたのである。

しばらく登ると境の所があつて、両側が切



りたっていて、そこへ私はへぼりつかない  
 ければ進めない祈があった。下を見ると境  
 つぼが口を開けていろし、遊園に進めな  
 状態であった。初本さんに足ののせる位置  
 を示して頭をながらやっとの思い出、登って  
 いったのです。岩登りの練習がしてあれば、  
 楽に登れるとのことである。

山は紅葉の時期を迎え、雨に煙る中、豊  
 かな聲で私を迎えてくれた。も、時内程  
 ばかり、次をゆり頂上へのつたのは正位少し  
 回っていた。僧と他のコースのパーサー  
 と合流し、ピリッぬぬはなりの下り。  
 宿の風呂に入り、華福をかめしめながら帰  
 路へつく。

巻杯山へは今年も紅葉の時期が登ってみ  
 たいと思っっているのです。



あけびの鳥

## あこがれの穂高

高橋直子

夜ともなると寒さを感ずる10月9日高尾  
 を出発しました。入念して二週間と下りな  
 い私なのに準備会が組み整頓など何も所た  
 ない事に。まだ早すぎるのかな。と夕暮  
 までもありました。とにかく秋の溜波に行  
 ってみたいという気持ちで、そんな不安も  
 抑しのけてしま、天ようぞす。

真夜中に着いた上高地は時々雨が降り、  
 寒さに震えながらミユラフにもぐり込みま  
 した。寝不足の目をすっかりさます程、霧  
 の中から次々に谷を覗く雪化粧をした岳  
 沢、奥穂がキラキラとまぶしい程に輝いて  
 いました。そんなウキウキした気分も重い  
 キスリングを荷動、歩きだす頃はずっか  
 り消えて、頭の中は休むことぞ一杯、昨日  
 とは違う、くま、た晴天にカメラマン達は忙  
 しく、私は荷の重さをすぼらしい景色にた  
 め息ばかりでした。ようやく湖沢にたどり

着いたのは4:30もう一歩も動きたくない  
 というのが本音でした。テント設置から夕  
 食まで重い荷物からの解放感と楽しいひと  
 所を過ごしました。湖沢団地のどの灯にも  
 そんな楽しさがあるように明るく、星座の  
 美しさも団地の灯の敷に小さく見えたよう  
 です。夜には山の御怒を思わせたテント風  
 景もいざ北穂南嶺をめぐるとはうらめしく  
 思えました。人、人、人の行列なのです。

それでも北穂南上より湖度の展望を自分の  
 ものにした時の感激ノ感激ノ湖沢嶺へ向か  
 う稜線では眼の前に広がる岩壁に圧倒され  
 、雪で覆べる道に慎重に進みました。待ち  
 所間にうんざりしている時に誰かが一言、  
 この景色もういい加減めきたネ。そんな具  
 合で寒さにふるえながら進むくんのびり  
 と穂高小屋に着いたのはすでに13:00。あ  
 まりの混雑ぶりに奥穂は断念しました。北  
 尾根隊の三人と合流して雪の降り初める南  
 、ゲイナングラードを下りました。

真赤なテナカマドの上に白い雪が新鮮で

印象的、夕食用より雪はみぞれに変わり、そ  
 の晩はテントは水で大騒ぎ、下山の日は  
 皆睡眠不足と、すっかり水を含んだ荷物に  
 足どりも重く上高地へと下りました。  
 あこがれの穂高に登れたことはもちろん  
 のこと、この山行での一番の思い出であり  
 収穫は楽しいテント生活であったと思いま  
 す。



# 清見登山について

石不傳明

近年、世高に於て二回清見登山が取り組まれた。第一回、第二回と回を重ねるうちに少しはきれいになつたなど、感じる様になつた。しかし必ず新しいゴミが目につく。10月に行なわれたゴミの大半は新しいゴミ、ゴミと言つてもそれはジュース、缶詰の空きが主であつた。

でもなぜゴミが多いいんだろう。ひとつは登山者のモラルの低下、自分一人くらいという気持ちで登山等を下す本音を露とせざるのだろう。それから登山者が多いということ、上越地区の中学生の多くは学校の野外活動の一として世高、大町の登山をする。籠かに汗をかいて登つて頂上で飲ぶコーラ、ジュースは大変おいしい、これだけの後が悪いだけだ。まだいう所の原因があると思ふけれど、どうしたら山に登山者が少なくなるんだろう。いつまでも自然のままであつてほしいと思ふ。

# 11月の火打路

丸山正天

11月の火打路にはいつも、笹ヶ峰を過ぎたところから踏み踏める雪が欲しいものだ。この道は私の散歩道として、勤務中の時間の予約を忘れるために他人の倍の時間をかけて歩いてゐる。

雪はに曲り、休み場を過ぎてもなかつた。ニツ沢を前にして、雪くのを嫌になつて寝転んだらスイーツと寝入つてしまつた。幼馴染の如く、山に入る前日は心がおどつて眠れない、山に入ると母の懐に入つた如く、どこでも眠れる。

ヒソヒソ声に眠を甦けるとバスで一踏だつた。二人、柿をうまそうに食べていた。水あります。と匂うと、柿とリンゴまで分けしてくれ、イビキをかいてましたよ。

富士見亭で、雪土が見える。どれ？どこ？と男連水があつても雪が寄つてくる。そのくすぐつたさよ。彼女らに引き連れ

水で黒洗下りをあきしめ、夜食にはひどい

類炊を食べ、ツイスキーと茶を空け、未明

出掛けの道前まで雷の洗練をする事になる。

(登ヶ峰) 高谷ヒエツチ、19(ネル)(ツイ)

監視者板取付、切戸(田中、奥野見え

ず) 火打山頂(小林氏と道過、あくま

でも鈴木さんと呼ばれ水一別れ、はい松バツ

トで昼寝、リングをくれる長谷川象と下司

——高谷ヒエツチ

ウサギゴフの如く笑顔を振り振り高谷が

登ヶ峰から来る。高野の安宿宿舎下とリン

ゴを置いて下りゆく。高谷は山中息を奪ひ

かてらに火打ハ。高谷、清水をトップに取

がバテテヤツクと、小倉、高谷がノックリ

新高を越えて来た。東屋宿三人は高谷が

った。高谷を置いて高谷がノックリして。

高谷が清水、小倉の持物を整理する中

と保護が、如め、おじさん、を止めたい。そ

の夜の雷で白化登った物志を監視する

カップを交す。

田中とは遠に連絡とれず、下山してか

ら焼山頂でガスに防まれて登ヶ峰に下りた

、と知る。私はそのガスでプロクテンを見

た。1/2のこと。

今回は各々個人山行で、集合山行で飲

ったが、こたわらずに連絡をとり合おう

努力した。他人マナーも良かった。他パ

テイを見ると、他人の事を考えず大音で歌

喝する若人、ゴミ持帰りのたれ幕の下に登

々と置いてゆく山岳人が目立った。

尚、付加えて、松岡君らから物志の登山路

で小倉、清水らの2パーティと逢った。園

く。元氣は少し減り、幸の他嬉しい。

(1/3) ヒエツチは——登ヶ峰は、AMの火打行は

清水、小倉と私でガスの中を行ったが途中

で引退したためパーティはなし

後々のミとだが、東京のこの時の仲間か

ら、先登、とさうあてがきで便りが届いた

(END)

# 会員紹介

関 由美 五十年六月八日入会

彼女は、童話を讀んだり書いたりするの  
かと、これも好きなんです。

そこで彼女の書いたものをごっそり持っ  
てたのへ後で怒られるかもしれませんが  
讀んでみて下さい。

白いものが空から落ちました。

小熊のコロちゃん頭の工にも落ちました。  
した。チョッピリ冷たくと、これもきれ  
いな不思議な白いもの、それはコロちゃん  
が初めて見るものです。コロちゃんはそれ  
を大事に手の中に入れて 母さん熊の前へ  
持って行きました。

「あれ？水になっちゃった。お母さん、空  
から白いきれいなものが落ちてるよ。」

「ホク、大事に持った。水になっちゃ  
た。あの白いものはなあに？」

「そうとうとう降った。雪と云って、冬将軍のおでましなのよ。私達は恐い冬将軍が通り過ぎる迄穴の中を眠って待つのだよ。ホラ、お隣りのおばさん達ももう眠りましたよ。」

「さあ、ぼうやも眠りましょう。」  
母さん熊と一諾にベッドに入ったけれど

コロちゃんは雪が気になつて眠れません。  
「お母さん、ユキのお話して」と

母さん熊に話しかけました。でも母さん熊  
はもう眠ってしまった。雪がありません。

コロちゃんほもう一度ユキがみえた  
くマソツと外へ出してみました。

「アルアル、と、寒いや。」

「でも野も山も町もみんな、みんなまっ  
白くきれいだなあ。」

「つづく」

「まだまだ続きますが、きりがないのでこ  
の辺をやめましょう。」

「いかがでしたか？少しは楽しんでいただけ  
ましたか？そして少しは彼女らしさ

をみいだしていただけたら、こっそり持ちだしたかがあるのぞすべ……

彼女は 一つの日の 子供達に読んではしいと真面目に書いているのぞす。

彼女は 現実と空想の世界の間をさまよっているような おかしな、そしてテロツピリわがままな、甘えん坊な女の子なのぞす。(本人は決してそうをばないと言ってますが。)

そして 彼女は童話と同じくらい山が好きなんぞす。彼女から聞く山の話はいつも頂上を味わう征服感と、景色のすばらしさと、又 バテちゃった。という一言をずが 私とシヨツピングを休日をすごすよりは、よほど楽しいぞす。

彼女のことだから とんなにバテても、これからも みなさんについて山へ行くと 思いますから、ゴシゴシいって立派な山女にしてみやっ下さい。

ーおわりー

## ハイキング部より

みなさまへ

ハイキング部員 募集しています

四季を通じてのハイク、レク活動に興味のある人、実際に活動してみたい人。冬のラングラウフ、春の残雪期登山、夏のキヤンプ、ハイク、秋の紅葉狩りetc色々あります。又 O.L. フォークダンス、うたごえ、ゲーム等のレク活動もあります。

まだ 出来たばかりのハイキング部、よちよち歩きもふきませんが、みんなの力も大きくしようとは思いませんか。

又 ハイキング部をこんなことをやってみよう、あるいはこんなことをやってみようという要望が意見等ありましたらお聞かせ下さい。

連絡は ハイキング部長大島迄。

# おとがき

上越地方を襲った豪雪にはマイナタ〜といふ感じで、この豪雪に会の新年会(引越)も出席者が少なかつたという事ですし、機関紙部としても打ち合わせが不能になったり原稿の回収が遅れたり等、少なからず影響を受けました。

こぶし八号は新スタッフで臨んだ最初の仕事になります。正月山行の計画などに追われて明確なる編集方針も打ち出せないう、発行の運びとなつてしまいました。打ち合わせも十分とは言えなく毎にミスも目立つかと思ひますが次号からは多少なりとも違つた形に、と考へております。

次号はハケ岳正月山行と特集に予定しております。そ小につけても思ふのは事務所の必要性です。

山行計画に必要なのは勿論の事、機関紙部としても現在打ち合わせ等は喫茶店を利用してありますので活動が活発にな小ばそ小たけ経済的負担も多くなるというもの。他の部に於いても同じ事を言えるでしょう。早く事務所を、と云うのが目下の願ひなのです。

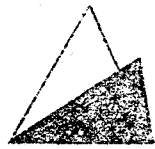
④中

## こぶし 第8号

1976年2月23日発行

発行 上越こぶし山の会  
編集責任者 田中 進

上越こぶし山の会  
新潟県上越市東本町5丁目1の38 杉本方  
TEL 0255(24) 3787



JKAC